

トリプル

TRIPLE

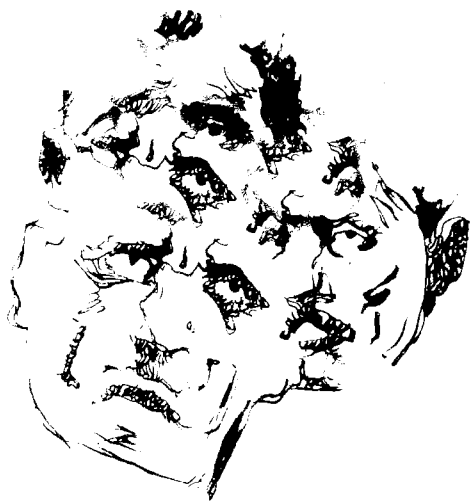
ケン・フォレット

一ノ瀬直二訳



トリプル

ケン・フォレット 一ノ瀬直二訳



集英社

TRIPLE

by Ken Follett

Copyright © 1979 by Fine Blend N. V.
Japanese translation rights arranged with
Writers House Inc. New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc.

トリプル

一九八一年一月二五日第一刷発行

著者 ケン・フォレット

訳者 一ノ瀬直二

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三ー六ー五
電話(〇三)二三九一三八二一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五ー一〇
電話 出版部(〇三)二三〇一六三六一
販売部(〇三)二三八一二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 一六〇〇円



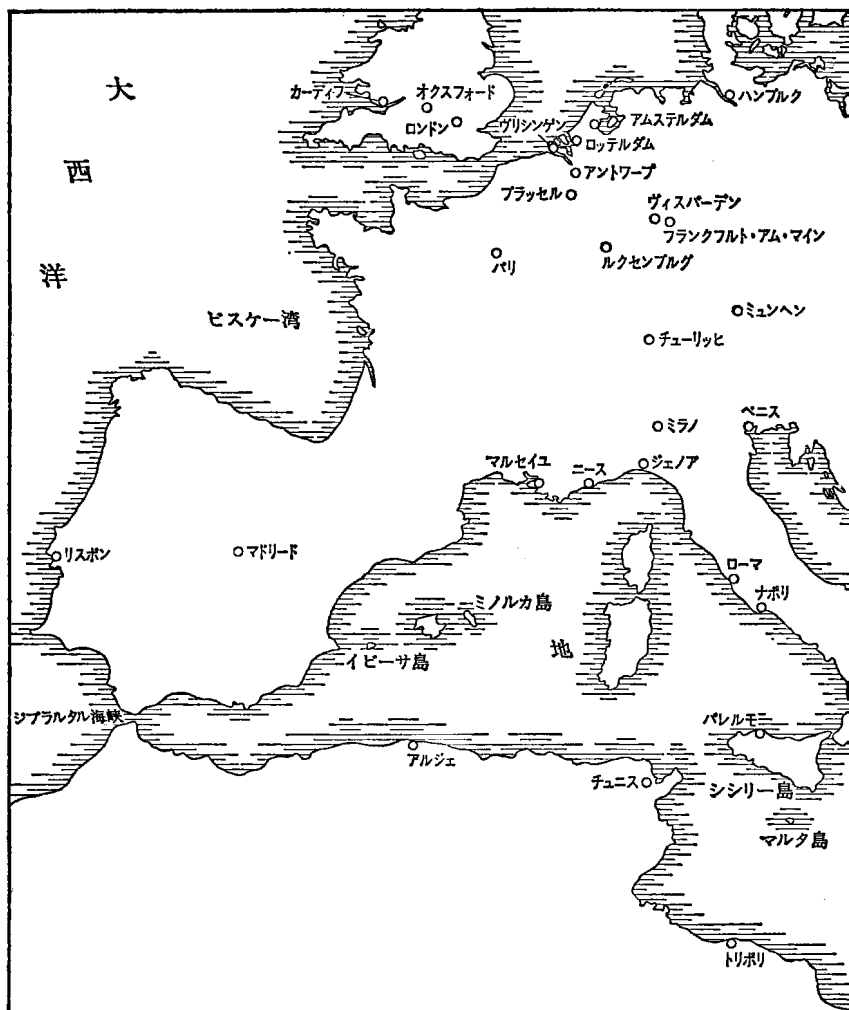
©1981 Shueisha

0397-776048-3041

著丁・乱丁本はお取り替えいたします

トリ
プ
ル





本篇の主舞台

ある種の原子爆弾の製造には、適当な純度のウラニウムが準備できるかどうかが問題なのであり、この困難を乗り越えれば、あとの爆弾の設計自体は比較的に容易なのであって……

——エンサイクロペディア・アメリカーナ

プロローグ

この異常な事件には幾人かの主要な人物が登場するが、彼ら一同が同じ場所に集ったのは、ただ一度だけであった。それもじつに幾年も前のことだ。それは彼らがまだ若かったころのことであり、それからずっとあとになってこの重大な出来事がおこったのだ。一度だけの出会いが何十年ものあとまで長い影を投げていたのである。

正確に言うと、その出会いとは一九四七年十一月の最初の日曜だ。その日に彼らは顔を合わせたばかりか、ひとつの部屋に落ち合いもした。しかしそのうちのある者は相手の顔を忘れたし、正式に紹介された相手の名を忘れた。その日のことをすっかり忘れた者もいた。彼らは二十一年後になって、その会合がじつに重要なものだったと知った時、覚えているようなふりをした。ちょうど古ぼけた写真を見つめて「ああ、もちろん知ってるとも」とうなずいてみせ

るのに似ている。

この最初の出会いの場所は英国のオクスフォード大学だった。ここではいろいろな国から来た有能な若者が偶然に集まるのも、よくおこることだ。そしてこういう連中がやがてそれぞれの国に帰り、各自の方法で権力を握り、決定をくだし、変更を命じるようになるのだ。こういう連中が偶然に集まり、それから後に重大な出来事がおこったのだ、そしてそれがおこった時には、最初の出会いに居合わせた人々も、この事件に巻きこまれることになった。

すなわち、最初のこの出会いは歴史的な重大事件ではない。大学町でよく行なわれるシェリー・パーティーにすぎない。すべてはごく平凡なこのパーティーが始まりだった。



アル・コートンは廊下に入ってからドアを叩き、そして待ったが、まさか生きている友だちがドアを開けてくれるとは期待していなかった。

彼はこの友だちがもう死んでしまったという考えをこの三年越し抱き続けてきたのだ。最初、ナット・デイクスタインが捕虜になったという噂を聞いた。やがて戦争の終りころ、ナチ収容所でのユダヤ人の運命に関する噂が耳にはいった、そしてしまいには、その噂が陰惨な事実だと確認さ

れたからだ。

ドアの向こう側では、幽霊が椅子をきしらせる音がし、それから部屋を横切る足音が聞こえた。

コートンは急に落ち着かない気持ちになった。もしかするとディクスタインは不具になっているかもしれない——ひどい姿だったらどうしよう？ もしいつが狂っていたら？ コートンは今まで不具者や気狂いときあいがなかった。彼とディクスタインは一九四三年にほんの数日だけ、ひどく親しくつきあった。それだけだ。今のディクスタインはどんな様子なんだろう？

ドアが開いた、そしてコートンが言った。「やあ、ナット」

ディクスタインは彼を見つめ、その顔に大きな笑いが浮かんだ。それからあの妙なロンドンの下町なまりで叫んだ——「こりゃ驚いたな！」

コートンも心の底からホッとして大きく笑った。二人は握手をかわし、たがいの背中を叩きあい、乱暴な兵隊言葉を交わしあった。二人は部屋に入った。

ディタスタインの住まいはこの大学都市の場末にある一軒の古い家のひと間であった。天井の高い部屋で、一人用のベッドがあるきりだ。ほかに古い黒木造りの衣装ダンス、それに似合いのドレッサー、小さな窓の前のテーブル

には本が積み重ねてある。コートンにはこの部屋がひどく簡素に思えた。もしおれが住むとしたら、もう少し何か置いて自分の部屋らしくするだろう——たとえば家族の写真とか、ナイアガラやマイアミ・ビーチの記念品、高校のフットボールのトロフィーなどを置くだろう。

ディクスタインが言った。「とにかくまず知りたいんだが、どうやってきみはぼくを見つけたんだ？」

「それがだよ、楽じゃなかったぜ」コートンは軍服の上衣を脱ぎ、それをベッドの上に置いた。「きのう一杯かかってやっとここが知れたんだ」彼は部屋にあるソファを見やっていた。それは両方の肘木が妙な角度に曲がっていたし、座席の菊模様は色褪せ、片方の脚が取れたのでその代わりにプラトーの厚い本を台にしていた。「それには人間が坐れるかね？」

「軍曹以上の階級は禁止だ。しかし——」

「あいづらはどうせ人間じゃないぜ」

二人は笑った——これは昔馴染みの冗談だった。ディクスタインはテーブルのそばの椅子を持ち出してまたがり、友だちをゆっくり見上げ、見おろしてから、言った。「きみは太ってきたな」

コートンは少し出てきた腹を軽く叩いた。「フランクフルトじゃあいい暮らしをしたからな——きみもあそこにい

れば楽しめたぜ……」彼はなにか秘密話をするかのように前にかがみこみ、声を低めた。「あそこじや一財産作ったぜ。宝石でも陶器でも骨董品でも、みんなタバコや石鹼で買えたぜ。ドイツ人は飢え死にしかけてたからな。それに——何よりもすごいのは——女たちがチョコレート一つでオーケーだったよ」彼は椅子に背をもたせて相手の笑うのを待った。ところがディクスタインは彼を見つめているだけだ。コートンはちよつと不満な気持になつて話題を変えた。「ところできみは太っちゃいないな」

彼は最初ディクスタインが無事であの笑い顔をしたのに安心して、ろくに観察しなかった。いま初めて、この友だちが瘦せているどころではないのに気づいた。ひどく消耗した様子だ。ナット・ディクスタインは小柄でほっそりしたタイプだが、今の彼は骨だけという様子だった。艶のない白い皮膚だし、大きな茶色の眼はプラスチック製の眼鏡の奥でことさらに大きく見えて、いかにも栄養不良の感じだ。靴下とズボンの間からわずかにのぞいている脛もマツチ棒のようだ。四年前のディクスタインは褐色に陽焼けしなやかな体つきであり、英国陸軍の長靴に劣らぬタフな様子だった。だからコートンは仲間に彼のことを説明する時には、よくこう言ったものだ——「おれの命を救ったあいつは、まず一番タフで、向こう見ずな兵隊だね、それだ

けは本当だぜ」

「太らないって？ そうさ」とディクスタインは言った。

「この国はまだちゃんと食料の配給をやつてゐるのさ。でも、まあ何とか生きてはいるよ」

「きみはもつとひでえ目にもあつたものな」

ディクスタインはにやりと笑った。「そしてそれをしのいできたからね」

「収容されたんだつてな」

「ラ・モリナでな」

「どうしてきみみたいな男が捕まつちまつたんだ？」

「簡単さ」ディクスタインは肩をすくめた。「弾丸がおれの足を貫通して気を失つちまつた。気がついた時はドイツ軍のトラックにいたんだ」

コートンはディクスタインの両脚を見やつた。「今はもうすっかりいいのか？」

「運がよかつたのさ。護送車の捕虜のなかに軍医がいて、骨をついでくれたんだ」

コートンはうなずいた。「それから収容所か……」彼はこの点を聞くべきでないと思つたが、しかし知りたくもあった。

ディクスタインは眼をそむけた。「はじめはよかつたんだがね、しまいにあなたがユダヤ人だと知りやがつた。お茶

が欲しくないかい？ ウィスキーを出すほどの余裕はないんだよ」

「いや、いらん」とコートンは言った。酒なら飲みたかったのだ。「とにかく、朝はもうウィスキーを飲まないことにしてるんだ。前に比べると乱暴な生き方もしなくなったからね」

ディクスタインはそらせた眼をまたコートンにむけた。

「やつらはおれの骨折した足を幾度も折りなおしては、またつなげる実験をやりはじめたよ」

「ひでえ」とコートンは低い声で言った。

「そんなことは序の口さ」とディクスタインは単調な声で言つて、また眼をそむけた。

コートンは言つた。「畜生ども」彼は他に何とも言いようがなかった。ディクスタインの顔には以前には見たことのない奇妙な表情があつた——どうやらそれは恐怖に似たものだった。でも奇妙だ。何といつても、もうすべては終つたことだ、そうじゃないのか？「まあ、何にしろ、おれたちは勝つたんだ、そうだろう？」彼はディクスタインの肩を叩いた。

ディクスタインは口をゆがめて笑つた。「そうさ。そのとおりさ。さてと、きみは英國で何をしてるんだい？ それに、どうやつておれを見つけたんだ？」

「おれはアメリカのバッファローへ帰ろうと思つた——まずすぐね。それから気が變つて、ロンドンで途中下車したんだ。それから陸軍省に行つて……」コートンはためらつた。というのは陸軍省に行ったのもディクスタインが、いつどんなふうに死んだのかを知りたかつたからだ。「そしてたつきみがステプニーにいるつて教えてもらつた」と彼は続けた。「それでそこへ行つてみると、焼野原に家が軒あるきりじゃないか。その家の中に、埃だらけの老人がいたぜ」

「トミー・コスターだ」

「そのとおりさ。で、おれはその老人に薄いお茶を十九杯も飲まされて、昔話をさんさん聞かされ、ようやく角を曲がつた別のほうの家を教えてもらった。そこへ行くときみのおふくろがいた、そしてまた薄いお茶を飲んで、彼女の昔話を聞いたぜ。きみのここの番地を知るところにはオクスフォードへ行く終列車も出ちまつたあとさ、だから朝まで待つて、やつとここに來たわけだ。おれはあまり長くはいられないんだ——おれの乗る船は明日出航するからな」

「じゃあ、除隊したつてわけか？」

「三週間と二日と九十四分前にな」

「故郷に帰つて何をするつもりだい？」

「まあ家業をやるのさ。ここ二、三年、自分は商売に向い

てると知りはじめたのさ」

「きみの家って何の商売なんだ？ 一度も話さなかったな」

「運送業さ」とコートンは短く言った。「で、きみは？

何でこのオクスフォード大学なんて所にいるんだ？ 何を勉強してらってわけだ？」

「ヘブライ文学さ」

「まさか」

「おれはね、小学校へあがる前からヘブライ語を書けたんだぜ、きみに話さなかったかな？ おれの爺さんじいさんは本物の學者だったよ。住んでたのはロンドンの下町で総菜屋総菜屋の上の小さな臭い部屋だったがね。おれはそこへ土曜と日曜にはかならず行った、物心のつく前から。ちっとも嫌じゃなかったぜ——むしろ好きなくらいだった。とにかくおれには他に勉強することなんてないんだ」

コートンは肩をすくめた。「どうか、原子物理学なんてのもあるぜ、それとも経営学とか。とにかくどうして勉強なんかするんだ？」

「幸福になって、りこうになって、金も持ちたいからさ」

コートンは頭を振った。「そいつはあんまり健康にはよくないぜ。ここには女はいないのか？」

「ごく少ないね。それに、忙しすぎてだめさ」

彼はデイクスタインの顔が赤らんだように思った。「嘘をつくなよ。恋をしてるんだろ。すぐに分るぜ。どんな女だ？」

「うん、じつはね……」デイクスタインは戸惑った様子だった。「手の届かない相手なんだ。教授の奥さんでね。エキゾチックで知的で、あんなに美しい人は会ったことがないな」

コートンは悲観的な顔つきになった。「どうもあまり見込みなさそうだな、ナット」

「分ってるんだ、でもどうしても……」デイクスタインは立ち上がった。「実物を見れば分るさ」

「彼女に会わせるのか？」

「アッシュフォード教授がシェリー・パーティーを開くんだ。おれも招待されてる。きみが来た時ちょうど出かけようとしてたんだ」デイクスタインは上衣を着こんだ。

「へーえ、オクスフォードの町のシェリー・パーティーか」とコートンは言った。「バッファローの連中に聞かせたら目を丸くするぜ」

▼
明るくて冷たい午前だった。この大学町にはクリーム色の古い建物建物がならびたち、弱い日射しがふりそそいでいた。

二人は両手をポケットにいれ、吹きつける冷たい十一月の風に背を丸めながら歩いていった。時折コートンはこう呟いたりした——「学問なんて——くだらねえよ、そんなもの」

町には人影が少なかったが、一マイルも歩いたところ、デイクスタインは通りの向こうにいる背の高い男を指さした。彼は首のまわりにカレッジ・スカーフを巻いていた。「あそこはロシア人があるぜ」と彼は言い、声をあげて、「おい、ロストフ！」

そのロシア人は目を上げ、手を振ると大まかに道路を横切ってきた。頭は短い兵隊刈りで、細くて長い体に既製服がダブついていた。ここでは誰も彼もがやせっぽらしい、とコートンは思いはじめた。

デイクスタインが言った。「ロストフはバリオール・カレッジにいらんだ。おれと同じ大学さ。こっちはダヴィッド・ロストフだ、こっちはアラン・コートン。アルとおれはイタリヤでしばらく一緒だったんだよ。ロストフ、アッシュフォードの家に行くのかい？」

ロシア人は重々しくうなずいた。「無料で飲める所ならどこへでも行くよ」

コートンは言った。「それにヘブライ文学にも興味をもってるってわけか？」

ロストフは言った。「いいや、私はブルジョア経済学を勉強しておるのさ」

デイクスタインは声をあげて笑った。コートンにはその冗談が分らなかった。デイクスタインが説明した。「ロストフはスモレンスクから来てるんだ。この男はCPSUの黨員さ——CPSUとはソ連共産党のことだよ」コートンはなおもこの冗談が理解できずにいた。

「ロシアからは誰ひとり外国にこれないものと思つてたぜ」とコートンが言った。

ロストフは長々しい説明を始め、父親は戦争の始まったころ日本にいた、などとも話した。その表情はごく真面目だったが、しかし時折は狡こづそうな微笑が洩れた。彼の英語はたどたどしかつたが、それでもコートンに彼がインテリぶつているという印象をあたえた。コートンはふと思った——まるで兄弟みたいに愛して共に戦った男が、ヘブライ文学など勉強しはじめたとたんに、自分のまるで知らない男になった、妙なもんだ。

ロストフはこう聞いた——「きみはまだバレスチナに行く決心をしていないのか？」

コートンが言った。「バレスチナへ行く？ 何のためにか？」

デイクスタインは困った表情になった。「まだ決心して

ないんだ」

「行くべきだ」とロストフが言った。「ユダヤ人は中近東から英帝国の残滓を払拭するのに手を貸さねばならん」

「それが党の方針というわけかい？」とディクスタインはかすかな微笑を見せて聞いた。

「そうだ」とロストフは真面目に言った。「あんたは社会主義者だ——」

「まあ一種のね」

「——そしてユダヤ人の新しい国は社会主義でなければならぬのだ」

コートンはとても信じられなかった。「アラブ人はあそこできみたちユダヤ人を殺してるんだぜ。おいナット、きみはついこの間ドイツ人の手から逃れたばかりじゃないか——」

「まだおれは決めてないんだ」とディクスタインは繰り返した。いらだたしように頭を振り「何をしたらいいのかわらないんだ」彼はそれ以上話したくないらしかった。

三人はせかせかと歩いていった。コートンの顔は寒さに凍りつくほどだったが、冬の軍服を着た体のほうは汗をかきはじめた。他の二人は噂話をはじめた。噂の人物はモズリーという名で——コートンにはまるで意味がなかったが——その男は学生団体に頼まれて、バンに乗ってオクス

フォードへやってきて、マータース・メモリアルで演説をすることになっていった。モズリーはファシストで、近ごろ勢力を増していた。ロストフはこの出来事をさして、いかに社会民主主義が共産主義よりもファシズムに近いかと論じていた。ディクスタインはこの催しをやった大学生がただ人を「驚かせる」ためにしたのだと主張した。

コートンは二人の男の話を聞き、二人を観察していた。

奇妙な取り合わせの二人だ——背の高いロストフはスカーフをきっちりと包帯のように首に巻き、大腿で歩き、その短かすぎるズボンをヒラヒラさせている。小柄なディクスタインは大きな目玉をし、丸い眼鏡をかけ、復員した時の軍服を着て、案山子が大急ぎで歩いているみたいだ。コートンは学問はなかったが、それでも勿体ぶった言葉のくだらなさを嗅ぎとる能力をもっていた。今この二人はまるでたたらめを喋っていると彼は感じていた。ロストフはおきまりの党綱領をたどおうむ返しに言っており、ディクスタインは無関心な気持を深刻な顔つきでごまかしている。二人とも巧みに議論を続けたが熱はなかった。まるで先を丸くした剣でフェンシングをしている時のようだ。

しまいにディクスタインはコートンが議論から残り残されていくのに気づいて、彼を話の中に入ればじめた。「ステイーヴン・アッシュフォードはちょっと風変わりだが、立

派な人物なんだ」と彼は言った。「ほとんど一生を中近東で暮らして、かなりの財産を築いたが、すっかり無くしてしまつたんだ。あつちではずいぶん突飛なこともしたようだよ、たとえばラクダに乗ってアラビア砂漠を横断するよくなね」

「しかしそれは一番あたりまえの横断の方法じゃないか」とコートンが言った。

ロストフが言った。「アッシュフォードはレバノン人の妻を持っているよ」

コートンはデイクスタインを見た。「彼女が——」

「彼女は夫よりずっと若いんだ」とデイクスタインが急いで言った。「夫は彼女を戦争の直前にイギリスに連れてきて、それからこのヘブライ文学の教授になつたんだ。もしも彼がシェリーの代わりにマルサラ・ワインをきみにおしつけたとしたら、きみはそれ以上歓迎されないという証拠だよ、覚えておくといひよ」

「みんなその違いを知つてゐるのか？」とコートンが言った。「これが彼の家だ」

コートンはそれまでややアフリカ風の家を想像していたが、アッシュフォード家はまったく英国風そのもので、緑色の棟木や組木と白壁でできていた。前庭は茂みが深く、三人の若者はその間の煉瓦敷きの道を家へ歩いていった。

玄関のドアは開いていた。小さな四角いホールに入った。どこか家の奥から幾人かの笑い声がする。パーティーは始まつていたのだ。二枚戸のひとつが開いて、この世でもっとも美しい女が出てきた。

コートンはハッと立ちすくんだ。そのまま彼女が出迎えるために自分たちのほうへ歩いてくるのを見つめた。デイクスタインがこういふのが聞こえる——「この男はぼくの友だちのアラン・コートンです」そして突然彼はその女の長い褐色の手を握っていた。暖かく乾いて、しっかりと感じて、コートンはそれを放すのがいかにも惜しい気がした。

彼女は身を返して三人を客間へ案内した。デイクスタインはコートンの腕をつかんでうれしげに笑つた——友だちがこの女を見てどう思つたか察したのだ。

コートンはようやくわれに帰つて、「すげえ」と言つた。シェリーのつがれた小型のグラスが小さなテーブルにズラリと並んでいた。彼女はそのひとつをコートンに手渡し、微笑して言つた。「あたし、アイラ・アッシュフォードです」

コートンは飲み物を手渡す彼女の様子をゆっくり眺めた。彼女はまったく飾り気がなかった。その美しい顔立ちには何の化粧もなく、黒い髪は真直ぐで、着ている物も白い服

とサンダルだけ——その効果はまったくヌードの美しさだった。そしてコートンは自分の心に湧き上がる動物的な欲望に戸惑った。

彼は無理に目をそむけてあたりを観察した。部屋は優雅に飾りつけられていたが、少し無理をしている感じも見てとれた。たとえば豪華なベルシヤ絨氈は広さが足りず、端から灰色のリノリウムがはみ出ていた。誰かがラジオの修理をしているらしく、中身がすっかり、洒落た小テーブルの上に散らかっている。壁には、長方形の明るい跡がついていて、そこには前に絵がかかっていたにちがいないかった。シェリー・グラスの幾つかは揃いのものではなかった。この部屋には十二、三人の人がいた。

みごとにパール・グレイの背広を着たアラブ人が暖炉の傍に立っていて、暖炉の上におかれた木の彫刻を眺めていた。アイラ・アッシュフォードが彼を呼んだ。「ヤシフ・ハッサンをご紹介するわ。故郷では彼の一家とあたしの一家はお友だちでしたのよ」と彼女は言った。「彼は今ウォーセスター・カレッジにいるのよ」

ハッサンが言った。「ぼくはディクスタインとはもう知りあいですよ」彼はみんなに握手してまわった。

このアラブ人、黒ん坊にしてはハンサムだなどコートンは思った。それに、金を作ったアラブ人が白人を家に招い

た時にみせるような、人を見くだす様子もみえた。

ロストフが彼に訊ねた。「あんたはレバノンから来たのかね？」

「バレスチナだ」

「ああ」ロストフは興味を示しはじめた。「すると国際連合の分割計画をどう思う？」

「駄目だね」とアラブ人は面倒臭そうに言った。「イギリスは出てゆくほかないんだ。そしてわが国は民主的な国を作ることになる」

「でもそうすると、ユダヤ人は少数派になるじゃないか」とロストフが言い返した。

「彼らは英国でも少数民族さ。ユダヤ人がイギリスでサリ州を自分の国として与えられることがあるかね？」

「サリ州は昔っから彼らの物になったことはないさ、一度もね。バレスチナはかつて、彼らのものだったからね」

ハッサンは優雅に肩をすくめた。「たしかに——ただしね、そんな古いことを言いだすんなら、ウェールズ人が英国を占領してたこともあるよ。英国人はドイツを占領していたし、それからノルマン・フレンチはかつてスカンジナビアに住んでたこともある」彼はディクスタインのほうに向いた。「あんたは、正常な判断力をもつ人間のはずだ——どう考えるね？」

デイクスタインは自分の眼鏡をはずした。「正常な判断力などどうでもいいけどね。ぼくらはただ自分の国といえる場所を欲しいのさ」

「たとえぼくらが国の国土の一部を盗んでもそうしたい、というわけだね？」とハッサンが言った。

「あんたの国は中近東の残りの部分を持てるじゃないか」

「そんなものは欲しくないんだ」

ロストフが言った。「この議論が示すようにやはり国土の分割は必要なわけだ」

アイラ・アッシュフォードがタバコの箱を差し出した。

コートンは一本取り、彼女のにも火をつけてやった。他の連中がパレスチナ問題を議論している間、アイラはコートンにこう訊いた。「デイクスタインを古くから知ってるの？」

「一九四三年に会ったんですよ」とコートンが言った。彼女は彼女の茶色の唇がタバコをくわえるのを見守った。彼女はタバコを吸う姿も美しい。そと舌の先からタバコのカスをつまみあげた。

「彼のこと、とても興味があるの」と彼女は言った。

「なぜ？」

「彼ってほんの若者でしょ、それでいてとても年寄りにも思えるの。それに彼はたしかロンドンの下町生まれね。そ

れでいてこの辺の上流のイギリス人と会っても、まるでおじけしないわ。ただし、何でも喋るくせに自分のことはいっさい言わないのよ」

コートンはうなずいた。「そういえば、ぼくも彼のこととはあまりよく知らないな」

「夫の話だと、彼は優秀な学生だそうよ」

「まあ」彼女はコートンをもっと丹念に眺めやった、まるで彼がメロドラマの主人公でもあるかのような視線だ。

どうやら彼にも興味をもったらしい。「あなたのその話、聞きたいわ」

ダブついたコール天のズボンをはいた中年男が彼女の肩にさわり、こう言った。「どう、うまくいってるかい？」

「ええ、そうよ」と彼女が言った。「コートンさん、こちらが私の主人、アッシュフォード教授よ」

コートンが言った。「はじめまして」アッシュフォード

は似合わない服を着ていて、頭は禿げはじめていた。コートンはまったく別の男を予想していた。アラビアのローレンスのような精悍な男だ。ところが実物は大違いなのだ。どうやらナットにもチャンスがあるな、と彼は思った。

アイラが言った。「いま聞いたんですけど、ナット・デイクスタインはこの人の命を救ったんですって」